

# せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成26年 12月 第166号 年間購読料1,000円(1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

## 介護現場の想いを込めて —認知症の人に学ぶ姿勢を学ぶカフェを—

認知症対策が高齢社会最大の課題といわれ、発症と進行を少しでも遅らせる為に早期発見・早期対応の研究と対策が国策として進められています。最近では、ノーベル賞を受賞された田中耕一さんが考案した装置で、血液中のアルツハイマー病の原因とされる物質量を計る事が可能とされ、大きな期待が寄せられています。

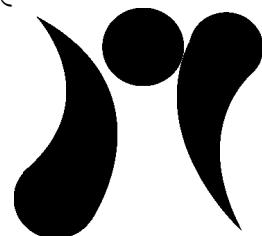
しかし一方で今、現に認知症になっている人の根本的な治療については不可能とされ、遠からず迎える最期への覚悟が求められます。『スローグッバイ』、確実に訪れる別れに向けて、準備の時間が約束されるのが認知症の特性です。ゆっくりと時間をかけて『心の準備』が出来るのです。

人が50歳を越えて長く生きる時、年齢相応の変化に対して柔軟に変身するのが『老いの特性』です。老いは受容を求め、変身を教えます。70歳~80歳を過ぎて老いを実感しながら認知症を患う場合は、大半の人が『脳の器質』に変化が生じて、生活の中で老いの変化を受け止めてきた感性・感覚の働きと、長年の生活で培った経験則の助けで、生活面での不安や混乱に適度に折角を着け、生活者として身に着けた知恵と勘が随所に現れ、其れなりに主役として生活を継続しておられます。

せいりょう園全体では、常時100人を超える認知症の人が居られますが、ご本人も周りの人も本当に困り果てるのは、いつも1人か2人か、といった処です。特養やグループホーム、ケアハウスや高齢者住宅でも、またデイサービスでも、重度の認知症の人が堂々と朗らかに生活しておられます。

居場所や人の認識があやふやで、少々つじつまの合わない言動があっても、その不確定さを『許容する環境』の中では、長年の暮らしで養った社会性のなせる業で、さほど困らずに暮らせています。むしろ、その『ベストを尽くして懸命に生きる様』は変化の真髄を現している様にも思え、自然の一員、社会の一員として、変化に順応して生き残る為の『極意』が、認知症の人から学べるようにも思えてきます。

人間は他の動物と違い、老いて死に逝く命を集団の中で看取  
(次ページへつづく)



(前ページのつづき)

る事で、社会を発展させて来ました。人間以外の動物は死期を悟ると群を離れますが、人間は互いに死期を意識しながら共に暮らす中で、遺伝子では伝わらぬものを引継ぎ、群が社会へと進化し発展して来たのです。老いを死への助走と捉え、認知症を老いに伴う機能障害と考え、認知症の人は命と引き換えに次の世代に何かを引継ぐ為の姿、と映ります。『命を引継ぐ営み』を心に留め、長い暮らしを凝縮したエキスに触れる介護の時を大切にしたい、と願います。

『認知症』については現在『解らぬ事』が先行している中で、重度の認知症の人の側で過ごしていると、予防・治療の為の研究・対策と同時に、並行して『認知症の人に学ぶ』姿勢が必要な様に思えてきます。介護の現場には『遺伝子では伝わらぬ思想・価値観』を育む為の原体験が詰っている、と感じます。

認知症の人を生活の主役として介護する時、長い人生に対するマナーとして、予防を口にする事は差し控えたい、との想いが生じます。認知症になっても尚、主役として暮らすその姿に対して、敬意を持って学ぶモラルをわきまめたい、と願います。本能により死期を悟って生き抜く「使命と誇り」を支える業務にプライドを持ち、介護を敬愛される職業として確立したい、と願います。そして認知症サポーターや地域で見守って下さる方々にも、そのマナーとモラルとプライドをお伝えすることが、介護現場の社会的使命だと考えています。

そんな想いと願いを込めて、『認知症の人とお茶するカフェ』を開きます

せいりょう園 渋谷 哲

### 母を看取られた御家族から、お手紙を下さいました。 御紹介させていただきます。



中村 秀樹

私の母親、中村静は平成26年10月21日にせいりょう園の皆様、私の妹に見守られ、静かに95歳の人生の幕を閉じました。その顔はいつもの辛そうな顔ではなく、まさに眠っているような優しい顔でした。

母親が、せいりょう園でお世話になったのが今から7年前の事でした。父と母は2人でマンション暮らしをしていたのですが、丁度父親が体調不良で入院している最中に、自宅で何か無理をして骨盤を骨折して倒れていたところを、たまたまデイサービスの方が発見し連絡をもらい、入院手術を受けました。ところが手術後急激に認知症が進み母親は大きな赤子のような状態になってしまいました。その変わり様と言え、これが母親かと思うと悲しく、受け入れるのが辛かった事を覚えています。しかし運動機能回復リハビリ等を通じていくうちに多少改善はしたものの我々がだれか、自分が誰か等の記憶がなく約9か月間病院を転々とし、母親の病院に通いながらも悲しい思いで帰るような状況が続きました。勿論自力で下の始末、歩行は出来ず、このような状態で我々が家で介護生活に入ることはかなり厳しいと思ひ、退院前に特別養護老人ホームを探すという日々が続きました。6, 7箇所に入園申し込みをして結果を待ったわけです。この時はどこか早く当たってほしいと神に祈るような気持ちでした。

私の妹は介護の勉強をしていてある程度の知識はあり、何なら家で介護をしてもいいよ、と言ってくれたのですが、実際はその様な気持ちは有難いが、現実として60歳を過ぎた我々にとって母親を思う愛情がいつかは苦しくなってきた憎しみに代わってしまうのでは、という私の考えを強引に押し付けて特養の結果を待つ事にしました。

結果幸運なことに、最も私の家に近いせいりょう園から連絡を頂き、二つ返事で入園をさせていただきました。初めは2人部屋で母親の状態も相変わらずの極度の認知症でした。回復の夢もなく母親との会話もなかなかできず、このまま時を待つものと覚悟をしていました。

またまた幸運にも入園後ひと月ほどで、新しい個室(ユニット型特養)に移動ができ、その直後から母親の認知症が嘘のように改善され、ある期間の記憶は無くなっているものの私たち家族や、妹夫婦、他の人々の記憶がよみがえり非常に驚いたものでした。

丁度この後父親が亡くなり母親に知らせぬまま葬儀を終えました。母親は記憶が戻り時々父はどうしているかと聞かれましたが、入院中と言う事で最後まで父が亡くなったことは知らずに終わりました。息子として、ある意味大きな悲しみを経験することなく終われたことも母にとっては良かったと勝手に解釈しています。この様に父親のことを思い気にするほど驚異的な回復をできたこと、園長様をはじめ介護担当の方々、食事を作ってくださる調理担当の方々、洗濯掃除の協力をされているの方々、事務担当の方々の暖かな気持ちのこもったサポートが母親を戻してくれたものと感謝の気持ちでいっぱいです。

その後の母親は車いす生活であったものの自分で車いすを動かしてトイレ、食事は自力ででき、会話も正常時に近くまで出来るようになりました。全く予想もしなかったうれしい出来事でした。春には車いすを押して桜と青空を眺め暖かな春陽を浴びたり、せいりょう園の近くの池の周りを廻ったり、調子の良い時は教信寺、野口神社まで足を伸ばし会話をしながら散歩を楽しみ、久しぶりに母親孝行が出来たものでした。母親も元気に大好きな即席ラーメンを隠れて食べ、食欲も旺盛で、笑うことも増え、楽しい園の生活を送っていました。

その後、昨年ごろから時々母親が体調を崩すことがあり、一時は食欲が落ちたり、だるさからベッドの手すりを叩いたり、昼は眠り、夜は大声を出してみたり、と辛さを訴えていたものでした。時々訪れてこのような母親を見るのも辛く寂しい気持ちで見守っていましたが、こんな時でも上手に母親を慰め、我々も出来にくいおしめの交換、食事介護、体調管理、体調を見ながらの入浴、母親の機嫌を取りながら心の通う介護をしていただき、お陰様で長生きが出来ましたこと心から感謝いたします。

私の母親は4男1女の長女に生まれ、母親が病弱のため4人の弟の面倒を見ながら生きてきた大正生まれの女性です。誰に教わるでもなく我流で自分の着物は自分で作り、我々子供の着るものもほとんど母親の手作りでした。妹のウェディングドレスも作るほどの腕を持っていました。編み物も得意で家の中でゴソゴソしているのが大好きで、外に出ること、いろいろな人々と交流することが大の苦手で、何時も子供のためにだけ生きているのでは、と思うほどの人でした。

だからせいりょう園の個室に入れたことは、非常に嬉しく母親が再び元気になるきっかけを作ったのかもしれませんが、何でも自力で頑張り、人様に迷惑を掛けたくないという思いの強い女性でした。ある部分介護をするほうにとっては、やりにくい面もあったと思います。

最後は自分の力ではどうすることもできないことを知り、せいりょう園の皆様のご厚情に触れ、母親なりに「ここの皆さんは優しいし、食事も美味しいし、言う事がないね。」と何度も言いました。母親もよく頑張って一生懸命生きた事を子どもとして尊敬したいと思います。

## テーマ「認知症カフェについて」



せいりょう園老人介護支援センター  
社会福祉士 吉田 知一

平成24年9月に厚生労働省が策定した、「認知症施策推進5か年計画」では、平成25年度以降、「認知症カフェ」を認知症の方と家族、地域住民、専門職等の誰もが参加でき、集う場として普及し、認知症の方やその家族等に対する支援を推進するとされています。インターネットなどで調べてみると、実際に多くの地域で開催されているようです。この度の語ろう会でもせいりょう園流の認知症カフェを開催致しました。

### ○開催の趣旨、狙い

実際に認知症を知る機会というのは、テレビや雑誌などのメディアを通して知ることが多いかと思います。その場合、認知症の大変さや暗い一面ばかりを取り上げているようにも思います。認知症になってしまえば、その人なりの生活は出来ない、と思われがちです。せいりょう園で過ごされている認知症の方たちは、日々思い思いの生活をされ、その人なりの生活を大事に過ごされています。カフェを通してその姿を知っていただくことが狙いです。認知症の進行を防ぐことや認知症の方の大変さを学ぶのではなく、これまで培ってきた逞しさや懸命に生きている姿を学ぶ場になればと考えています。

### ○内容

せいりょう園で実際に過ごしていただいている認知症の方たちと一緒に紅茶やコーヒーなど飲みながら語っていただくカフェスタイルになります。語ろう会の参加者は15名。せいりょう園で過ごされている認知症の方の参加は10名でした。

印象に残ったこととして、ある認知症の方は「私は毎日宇宙の本やエネルギーの本を読んでいます。気になったことがあればノートに書き留めています。世の中にはまだ使われていないエネルギーがたくさんあります。そのことを考えるだけで幸せなんです。」とおっしゃっていました。この方はもともと電力関係のお仕事をされていた方です。また普段から作っている貼り絵を披露してくださる認知症の方もいました。すごく細かく貼り合わされており、色の濃淡も繊細に表現され、とても私には出来ない作品でした。その他には、参加されていた方の悩み相談を受けている認知症の方もいらっしゃいました。

### ○参加された方より

- ・私が思っていた認知症の方の生活とは違っていた。認知症になれば、何も分からなくなると思っていたが、皆さんそれぞれの生活を楽しまれていると感じた。
- ・私が知らないことをたくさん知っていた。高齢になっても認知症になっても何かを学べることを学べた。
- ・会話していても特に違和感なく、私たちと同じひとりの人間として何ら変わりはないと思った。

## 感想

東北の震災以降、地域の絆や繋がりが重要視され、国の施策としても住み慣れた場所で長期まで過ごせる地域作りとして、地域包括ケアシステムの推進を全国的に進めています。しかしながら、「地域の絆や繋がり」というキーワードだけが先行してしまい、何の為にそれをするのか、という肝心な目的が曖昧で「器」や「場」作りだけが盛んに行われているように思います。今回の認知症カフェの推進もそのひとつだと言えます。

神戸大大学院教授で個人と組織の良好な関係のあり方を研究している鈴木竜太氏が、10月5日の神戸新聞の記事の中で「強いコミュニティの上に強い個人主義が成立する」という公共哲学の研究者の言葉を紹介されていました。「強いコミュニティ」とは強い地域の繋がりで、「強い個人主義」とは個々人の尊厳や自立心などの思想そのものだといえます。つまり、強い地域の繋がりの中でこそ個々人の思想が育まれるということです。この「強い地域の繋がり」とは、他者との関わりであり、他者との違いに気づくことであり、また、自分の個性や能力を自覚していく自己覚知の場であると考えます。そしてこの自己覚知の場の成立として前提にあるのが、「他者を尊重する」という「姿勢」であることに他なりません。私たちはどんな時に学ぼうとするのか、それは対象に興味を持ち理解しようとする姿勢、尊重しようとする姿勢があるからこそ学びに繋がると考えます。例えば、私は好きなアーティストの音楽が町中で流れていればすぐに気づきますし、聞こうとします。一方でまったく興味のないアーティストの音楽がテレビで流れていても気に留めませんし聞こうともしません。それが、実は一生に一度出会えるかどうか分からないような名曲であったとしてもです。このように、対象に対しての私たちの姿勢が、自分の学びになるかに大きく作用しているのです。

行き過ぎた成果主義や効率を重視する合理主義社会では、他者との違いを「学び」ではなく「比較」として捉え「優越感」や「劣等感」に繋がっていく場合が多いように思います。それ故に「認知症カフェ」の場で認知症の方と接することで「ああはなりたくない」「かわいそうな人」として捉えてしまう可能性もあります。

もうひとつ、場の成立として「異論に対する寛容さ」が重要である、と鈴木氏はおっしゃっています。「異論」とは「違い」であり、今回の認知症カフェの中でいうところの「認知症」であり、認知症が引き起こす様々な症状、障害そのものになります。違いに対する寛容さ、許容する環境が無ければ、認知症の方の生活は窮屈なものになるでしょうし、私たちが認知症の方と接し理解する機会も少なくなるでしょう。

今回せいりょう園の認知症カフェに参加された方の様々な気づきは、違いに寛容であり、認知症の方を一人の人間として尊重し理解しようとしたからだと考えます。今回のカフェでは軽度の認知症の方の参加が多くありましたが、重度の方との関わりも考え、ご本人のありのままを発信できる相互理解の場を作っていきたいと考えています。

### 【せいりょう園待機者状況 平成26年12月12日現在】

○入所判定済み者 340人（グループの内）

Ⅰグループ…113名 Ⅱグループ…128名 Ⅲグループ…99名

※このグループ分けは、県の「入所判定マニュアル」に基づき、緊急性を評価して分けています。Ⅰグループが最も緊急性の高いグループとなっています。

判定後、状況の変化がありましたら、ご連絡下さい。



真宗 大谷派 光念寺  
本多 正尚 住職

ディサービス 谷澤 高明

師走に入った。今年も余すところ1か月、本格的な冬の到来である。理由はわからないが、冬が近づいてくると、なぜか遠くの音がよく聞こえるような気がする。夜は特にそうだ。いまは早寝早起きで、すぐにぐっすり眠りについてしまうが、幼い頃はサッシのない時代、家も隙間だらけで寒いし、寝床に入ってもなかなか寝付かれなかったものだ。冷たい風がヒューン、ヒューンと電線を鳴らす。そして遠くを走る車のブーン、ブーンという音。ケーン、ケーンと空気を切り裂くような踏切りの警報器の音などが、近く、長く聞こえてきた。川にかかった鉄橋の上を走る列車の音がひとときわ高く聞こえた。遠くに走り去った列車の音が、もう耳に届くはずがないのに、レールのつなぎ目の音が頭の中でいつまでもいつまでもコトン、コトンとリズムを刻み続ける。こんなに寒いのに、こんなに夜遅いのに、どんな人が列車に乗っているのだろう。どこまで行くのだろう。どんな気持ちで乗っているのだろう。そんなあてどもない空想にふけりながら、その音が子守歌になって眠ったことを思い出す。それを思うと、いま、閉めきった部屋でボタン、キューで眠ってしまうのが少し味気ない気がする。

今年最後の仏教講話には、先月に続いて 真宗 大谷派 光念寺 本多正尚ご住職に来て頂いた。早朝から荒れ模様で、風雨が強く、これは大へんな一日になりそうだと心配していたが、早々に雨も上がり、気温も上がって助かった。ご住職も「暖かいですね。12月とは思えませんね」と挨拶された。初めに人間について話を始められた。人間のことを「人」とか「身」とか言うが、「人」は他人のような気がするが、「身」というと自分のような気がする。わが身などと言うように。しかし「身」は独立して単体で存在しているものではない。身をたてるには、大地がいる。空気がある。水がある。水は天の雲から降ってくる。雲は海から発生する。海にはたくさんの川が流れ込む。となれば、川・海・雲・雨も我が身となるものである。こうした仕組み(世界)が私たちのまわりを取り巻いている。これは自然の世界である。私たちの回りには人の世界もある。自分自身は何人も人の存在によって今があり、そしてまた次の世代へと繋がっていくのだろう。人は経験を伝える。しかし、受け継がれた経験は記憶が薄れて、忘れられてしまう。そしてまた同じような経験をして後世に伝えていく。

ここでご住職は『ファミリー・ヒストリー』というTV番組を紹介された。残念ながら私は観たことがないのだが、番組スタッフがある著名人の先祖を徹底追跡してレポートするらしい。自分の生命の流れの中にそんな先祖がいてくれたのか、ということに誰もがびっくりするらしい。レポートされた本人はもちろん、TVを見た視聴者も勇気づけられるとか。

最後に厳しい人生を経験した人が、不遇の中で必死に生き抜く姿を紹介された。中国の奥地漢口で兵隊にとられ、上海から満州まで行軍。満州で終戦を迎えたが、捕虜になりシベリアへ2年間抑留された。帰国して妻と再会し、菓子屋の主人の世話で夫婦住み込みで働き、独立開業する。しかし妻が亡くなり、本人も血管が切れ、体が不自由になる。しかたなく施設に入るようになった。そこにピアノがあった。経験もなく、まして不自由な体であったが、教えてもらって戦時中よく歌った『麦と兵隊』を片手で弾きはじめた。楽譜もなく、楽譜があっても読む知識もなかったが、自分で音を探して弾きつづけた。そして、自分の伴奏で『麦と兵隊』を歌うことができるようになった。彼は自分の人生を考えた。人生の節々でいろんなこと

にあって、自分の 80 年の歴史は頑張りの連続であった。今はこんな不自由な身ではあるが、ただごとではない一生であった。しかしこのような中でも生き抜く必要がある。こんな身であっても、自分のものではない。決してちっぽけな命ではない。それを知っているのは自分である。ここでくじけてはいけない。投げ出してはいけない。自分で止まることがあってはいけない。

「ますます気候も厳しくなりますが、皆さんお元気で新年を迎えて下さい。また来年お会いしましょう」とにこやかに本年をしめて頂いた。今年も大変お世話になり、ありがとうございました。今後ともよろしく願いいたします。1月は仏教講話お休みです。皆様よいお年を!!



### 『生涯現役で働けるような職場』として…

せいりょう園では、本人の勤務意欲と業務遂行能力があれば上限年齢はなく雇用の継続をしています。高齢者の持つ生活経験の豊かさが「介護の質の向上」に繋がると考えています。定年後に働く職員からの声です。



柏木春恵氏 73 歳  
ユニット型特養  
介助員(環境整備)  
13:00~17:00  
(週3回)勤務  
平成 25 年3月~現在



**働く動機** 出来る事があれば…役に立つことがあれば…という想いがあり、近くで働きたいと考えました。友人は「働くところがあって良いなあ。」と言われます。この年齢になると働きたくても働き場がないという友人が結構います。

**働くメリット** 限られた時間で働く事が出来ます。私の体力に合った勤務が出来ています。余力が少し持てるように勤務出来るのが良いです。これからも、この調子で長く働き続ける事が出来れば良いと考えています。

※柏木さんは、同じ職場内で清掃員として働く障害者就労支援の職員に対しても、成長を促すような指導を行っています。人生の先輩として優しく、そして時には厳しく見守っているようです。

#### 【せいりょう園空き情報 平成26年12月15日現在】

- ① ケアハウス：2室 (バス・トイレ・キッチン付24㎡)
- ② グループホーム：空きなし
- ③ グループホームまどか：空きなし
- ④ サービス付き高齢者向け住宅「リバティかこがわ」：2室
- ⑤ サービス付き高齢者向け住宅「自愛の家さくら」：空きあり

[問合せ先] せいりょう園 TEL(079)421-7156/(079)424-3433



# せいりょう園行事だより



最近せいりょう園内では、音楽に接する機会が多くなりました。

## 平成 26 年 11 月 21 日（金）二胡演奏会



二胡とは中国の伝統的な楽器です。憂いを帯びた音色で「ふるさと」「上を向いて歩こう」等を奏でて頂きました。中国の楽器ですが日本の愛唱歌にも、とても合います。

ボランティアの皆さんは、人前での演奏が今回初めてとの事。「お年寄りの皆さんとの交流を楽しむ事が出来ました。」と言われていました。

## 平成 26 年 12 月 1 日（月）氷丘中学校吹奏楽演奏会



学生の皆さんは、最初は緊張した面持ちでしたが、アニメ・演歌・童謡・クリスマスソング等の様々な曲を1時間ほど演奏してくれました。

最後には、お年寄りからの拍手や「ありがとう」の言葉を聞き、ホッとした表情を浮かべていたのが印象的でした。

## 平成 26 年 12 月 13 日（土）第 24 回ロンドンアンサンブル



ロンドンアンサンブルを毎年開催して、今年で24年目となります。

年の瀬に、世界で活躍する演奏者の優雅に奏でるクラシック音楽を聴きながら、非日常的な空間を楽しむことが出来ました。

アンコールでは「きよしこの夜」を観客の皆さんと合唱。温もりを感じながら、今回のコンサートの幕を閉じました。